『山あり愛あり』の主人公・大鉢周三は北大山岳部に所属してOB隊のヒマラヤ遠征にも参加した「山男」であり、卒業後は道内で高校の教員になって登山を続けるつもりでいた。ところが師と仰ぐ山岳部OBと同期の仲間を立て続けに喪ったショックから、法学部でのゼミの先輩にさそわれるまま大手都市銀行に就職する。華やかなりしバブル経済は数年後には崩壊し、周三は入行後の大半を不良債権の処理に追われて過ごす。家庭には恵まれて一男一女をもうけたものの、山への憧憬はおさえがたく、勤続二〇年目にして早期退社し、登山を再開しようとするところから小説の幕が上がる。もともと、そのときを待っていたかのように蓋をしていたはずの問題が持ちあがる。父親を知らずに育った周三は母親とも義絶していたが、その母が死に瀕しているという……。

いったいどこが「山」の話なのだと思われそうだけれど、それは読んでのお楽しみというようにしておきたい。わたし自身は山岳部ではなかったが、周三と同じ年代に恵迪寮で暮らし、寮自治会の執行委員や執行委員長を務めた。六年目四年で法学部を卒業したところも同じなので、周三とはかなりの性質を共有している。

『山あり愛あり』だけでなく、わたしの小説には北大がらみの主人公が多い。デビュー作「生活の設計」は私小説なのでわたしの経歴がほぼそのまま書き込まれている。『灰色の瞳』も男性の主人公は北大卒だし、『ぼくたちは大人になる』は北大医学部をめざす高校生の話だ。ただし、それらの小説の舞台はいずれも内地である。

「愛するものについて、うまく語れない」と書いたのはスタンダードだけれど、小説を書くようになって、まさにそのとおりなのだと思感させられた。わたしが札幌を舞台にした小説に取り組んだのは『おれのおばさん』が最初であり、デビューから十年が過ぎていた。満を持した甲斐あって拙作の中では最大のヒットとなり、『おれたちの青空』『おれたちの約束』『おれたちの故郷』の続編が書き継がれた。第二作目の『おれたちの青空』には現在の恵迪寮が登場する。

札幌を舞台にするとやはり筆の冴えが違うという感じなのだが、自分が在寮していた時期のこととなると「二月」と「八月」（いずれも『静かな夜』に収録）の短篇でしか取り組めていない。言いわけになるのを承知で言えば、「生活の設計」から『山あり愛あり』まで、わたしの書くもの全てに十八歳で親元を離れて北海道にわたった者の気概が横溢しているはずである。

執行委員長として教官回りをしていたとき、東大出身の教授に次ぎのように言われたことがある。

「今は威勢がよくても、大半の学生は卒業したら世の中に流されるばかりで、自分がかつて何を語ったのかを思い返したりしない。だから、そうした無責任な学生による自治など

およそあてにできないので……」

「おい、オマエ。東大に残れなかったから仕方なく北大にやってきた分際でエラそうなことをぬかすんじゃない。おれたち恵迪寮生はなあ、北海道に憧れて、十八や十九で親元を離れて、津軽海峡をわたって札幌にやってきたんだ。そのやむにやまれぬ気持ちがあたかだか就職程度で消えるわけがねえだろ」

ハラワタは煮えくり返っていたけれど、口に出したら殴りかかってしまいそうだったので、わたしは早々にその場から引き上げた。

「いいか、恵迪寮で生活したことが人生にどれほどの影響をもたらすのか、おれが証明してみせてやる！」

教授個人へのこだわりはとっくに失せてしまったが、そのとき湧いた憤りは今もわたしの胸に生きている。

『山あり愛あり』の周三は山への憧れによって自らを律してきた。しかし、かれが恵迪寮生であったことを忘れてもらっては困る。『おれのおばさん』で児童養護施設を主宰する「恵子おばさん」は恵迪寮生ではないものの、苦境にありながらも決して妥協しない精神は若くして北海道にわたったからこそ培われたのだと、わたしは確信している。

無責任極まりない事故や悲惨な事件が引きも切らずに起きて、ともすれば気が滅入りそうになるけれど、そんなとき周三は、「山に向かって姿勢を正す」と呟く。それは作家の新田次郎が好んで色紙等にした言葉だという。それをもじって、わたしも気が弱ったときには、「北に向かって姿勢を正す」と呟き、恵迪寮での日々を思い返している。今日も、同じ思いで、「都ぞ弥生」をはじめとする寮歌が歌われているにちがいない。

恵迪寮の永久の繁栄と、皆様のご活躍を祈りつつ、一文を終わります。